

2021年 入試改革

共通テスト 国語・数学 記述式問題 2021年の導入を見送り

採点に関する課題解決に至らず、
本番1年1か月前の変更

旺文社 教育情報センター 2019年12月17日

2021年から実施の大学入学共通テストの国語と数学における記述式問題の導入が見送られた。12月17日、萩生田文部科学大臣が記者会見で明らかにした。あわせて、今回の導入見送りは期限を切った延期ではないとも説明。11月1日に発表された、大学入試英語成績提供システムの導入見送りに続き、入試改革での取り組みが、再度見送られた。

●国語と数学 記述式問題の導入見送り

大学入学共通テストは「知識・技能」だけではなく「思考力・判断力・表現力」も重視して評価することを趣旨としている。なかでも、国語と数学では、その方策の1つとして、記述式問題が出題されることになっていた。国語は大問1問（小問3問）が記述式で、もっとも長い問題で80～120字程度が上限。数学は数式等を記述する小問3問が予定されていた。

一方、センター試験での例年の受験者数は、国語が約52万人、数学が約40万人（記述式が出題される「数学I」と「数学I・A」の受験者〔出題範囲は数学I〕）。共通テストの実施日は、1月13日以降の最初の土・日とされ、これはセンター試験と同様だ。その後の各大学の入試日程もあり、20日程度という短期間で大量の答案の採点が求められることとなっていた。共通テスト導入に向けて行われた試行調査（2018年度実施分）では、さまざまな要因はあるとされるも、最大で0.3%の採点結果の補正件数が報告された（国語。総検収件数に対する数値）。また、各小問の採点結果と受験生の自己採点との不一致率は、国語で30%前後、数学で10%前後となっており受験生の出願校決定への影響が指摘されていた。

萩生田文科大臣は、採点体制、採点の正確性、自己採点の難しさなどの課題を踏まえ、「受験生の不安を払拭し、安心して受験できる体制を早急に整えることは現時点において困難であり、記述式問題は実施せず導入見送りを判断した」と説明。数十万人の答案を、短期間で正確に採点することを担保する制度設計が困難であったことを示す結果となった。

今後は、大臣が設ける検討会議で、大学入試における記述式の充実策についても検討するという。また、思考力等の評価のために、各大学の個別試験での記述式問題の活用を促していくとも説明した。

●今後、試験時間の見直し、各大学の「予告」の変更などに注視

萩生田文科大臣は、試験時間や配点については、方針を決定し速やかに周知すると説明した。既に発表されている共通テストの試験時間は、記述式の解答時間も含むため、国語は従来の80分から100分に、数学（「数学Ⅰ」と「数学Ⅰ・A」）は60分から70分へと時間は長くなっている。

また、記述式の採点は時間がかかるため、大学入試センターから各大学への、受験生の成績提供が、これまでより1週間ほど後ろ倒しに設定されている。今回の記述式問題の見送りを受け、この日程がどうなるのかは、とりわけ私立大の入試日程には影響が大きい。

11月1日の大学入試英語成績提供システムの導入見送りを受け、国立大は11月29日までに、公私立大は12月13日を目途に「予告」を変更している。各大学では、共通テストの国語と数学についても同様に、これまで公表してきた「予告」の変更を迫られる。



大学入試では「2年前ルール（※）」がある。11月の「大学入試英語成績提供システムの導入見送り」に続き、今回の「共通テストでの記述式問題の導入見送り」は、受験生にどのように映ったのかは、想像に難くない。影響は各大学の「予告」にも現れ始めている。国の方針転換に伴い、各大学では「予告」の変更を重ねざるを得ず、「予告」が断続的かつ断片的になってきている。受験生が「予告」を理解するのが困難な実態も見られる。

受験生が受験勉強に専念できるような、わかりやすい情報公表と、各大学の「予告」変更情報を期待したい。2021年共通テストまで、あと1年と1か月だ。

※入試で課す教科・科目の変更等が入学志願者の準備に大きな影響を及ぼす場合には、2年程度前には予告・公表する。その他の変更についても、入学志願者保護の観点から可能な限り早期の周知に努める／文部科学省：大学入学者選抜実施要項より抜粋・一部要約。